



入学試験問題
国語

函館ラ・サール高等学校
2020年2月18日

〔問題二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① 関係性を無意識のうちに形づけてくれる敬語は、なかなか便利なものですが、その便利さは同時に② 大きな弊害をもたらします。

私は、無意識であることについて、かなりしつこく難^aじてきました。無意識であるということは、言葉についても、話し方についても、自分と相手の関係についても、多くの事物に無自覚であるということの意味するからです。

大人であるということは、意識していないこと、意識したくないことについて、明確な認識をもとうと試みることに、そのような意図のもとに、自己と他者と世間を見つめることです。無自覚であること、自分の立場や位置について認識が甘いということは、それだけで恥ずかしいことであると銘記する勇氣と緊張こそが、大人である証^{あか}しなのです。肝心なところをあいまいにしておいて平気な鈍感さや、認識し考察する緊張に耐えないのならば、世間で旺盛に生きることができません。

話を戻しますが、敬語には、こころした意識を鈍磨^あさせてしまう要素があるのですね。つまり^b機械的に敬語を使用しているうちに、相手に対する認識が甘くなってしまうということなのです。

③ これは敬語の人、これはタメ口の人、と使い分けられているうちに、各人にたいする値踏み^あを、発話のうちに盛り込んでいけなくなってしまうのです。

敬語とは、人間関係を区分することによって成り立っている言葉です。区分するというのは、敬語を使うべき相手と、場面、立場を分けるということです。

ただ、言うまでもないですが、この分けとけというのは単純で硬質なものではないのです。

バイトの時は敬語を使うとか、職場では敬語を多用するといった、単純な問題ではありません。というよりも、そういうマニュアル的な世界での言葉遣いは、さほど問題にはなりません。無論現代人たる私たちは、多かれ少なかれマニュアルの世界とかかわりなしには生きていけないわけですから、仕方がないのですが、だからこそマニュアル的な話法にたいして、④ 常に緊張をもつていなければならないのです。

では、敬語における緊張とは何でしょうか。

それは、敬語の本質にたいして、常に意識的であるということです。

敬語の本質とは何でしょう。

それは人間とは決して平等ではない、均質な存在ではない、ということですよ。

人間は平等ではない、などと言うと言われ驚かれますよ。

そりゃ、私のような人間だつて、法的、公的には人間は平等であると思つていますよ。そうでないと困ります。

しかしまた、個々人の主観から見た場合、決して人間は平等ではない、むしろきわめてはげしい偏差をもっているのではないのでしょうか。

いや、私にとっては人間は平等だ、誰もが同じ価値をもっている、と言う方は、本書を読むのはやめて下さい。そういうウルワシイ心をもっている、あるいはもっていると思ひ込んでいる方は、私の読者としてふさわしくありませんから。

イバツても仕方がないのですが、言葉について考える時には、やや反社会的な感覚が結構大事なのです。世間で大手を振つて歩いているような観念を鵜呑みにしているようなことでは、しっかり会話をする^{ゆえん}ことなどは出来ないのです。それが、本書が「悪」をうたっている所以です。

人は平等ではない、という事態を^{わきま}弁えておくことが、なぜ敬語を用いるにあつて大事なのか。

それは、敬語が決して自分が相手と平等・均質ではない、という認識の直接的な反映であるからです。それは、どちらが上とか下ではない、対等かつ同質ではないという緊張の反映なのです。

ぞんざいな口をきいたり、対等に話したりすることが、親しさのあらわれであると考える人が少なくありません。しかし、私に言わせると、それは親しさではなく、弛緩^{ちくわん}なのです。私は女友達に対しても、どんなに親しくても敬語を使つていましたし、家内にたいしても敬語を使います。

それを他人行 A だと思ふ人もいるでしょうが、いかなる恋人、夫婦といえども他人です。決して自分ではない。当たり前のことです。

恋人といえども他人である、という認識があつて、はじめて信頼と尊敬が生まれるのですし、さらに言えば、「甘え」することも出来るのです。このところを崩してしまつたら、親しさも何も成立しない、なし崩しにおかしくなっていくだけです。

その点で面白いのは、関西弁での敬語のあり方です。大阪、京都、神戸の方の話し方を観察すると、^⑤とくに「婦人方」の話し

方はいい。

もちろん関西といつても、いろいろあるでしょうが、一定のクラスの人たちの話し方を聞いていると、その柔らかさとともに、敬語の頻用に驚かされます。それこそ夫婦間どころか自分の子供について話す時にも、「……しはった」などと敬語を使い、さらにはなほだしい場合には、「泥棒さんが入りはった」などと自分が被害にあつた場合においても、徹底的に物柔らかく、かつ敬語を崩さないのです。

こうした敬語の使い方が優美であることは否定できませんが、同時にいかな子供であれ、見も知らぬ泥棒にであれ、敬意を表して見せる意識の油断のない姿勢こそが、その柔らかさを確かなものに行っていることも否定できないでしょう。

私の知っている京都のお料理屋さん、大変意地悪というか、ほとんど人の悪口しか言わない。でも、その悪口がとても柔らかい京都弁で語られるので、耳に優しくなってしまう。私がある寿司屋すしやでうまいシマアジを食べたと言うと、「そりやよろしおすなあ、あちらさんのシマアジはいい養殖物を使わはつてるから、よく脂がのつてコクがありますやろ」などと言う。要するに天然ではないとくさしているのですが、そういう⑥悪口を婉曲に柔らかく言う、その回りくどさにシビれます。

実際に、その言葉が与える感触とは別に、関西の方々であつても、この世知辛い世間にほかの人々と同様に生きているのですから、相応の打算計算があるのは当然です。ところが、表面的に当たりが柔らかいために、私のような東夷あづまえびすから、京都人は B 黒いなどといわれのない非難を受けます。

しかし、このような非難はそもそも認識が甘いところから来るものなのです。礼儀の項でも申しましたが、丁寧な人ほど、対人関係に意識的であり、抜け目がないのは当然なのです。そこところが解わかっていないで、当たりが柔らかいのに B は違う、などと甘えた苦情を言うことになる。

そうではなく、まったく逆に、隙のない姿勢を、きわめて優美な話し方に込めて実現していることに、敬意を抱くべきなのです。敬語とは、まさしくかように、⑦きわめて高い洗練と悪の意識を盛り込むことが出来る器なのだ。

(福田和也『悪の対話術』より)

(一) 〓 線部 a 「難じ」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 問題があるとして非難し イ 至難のものとして否定し
ウ 課題の困難さを指摘し エ 難解さに疑問を呈し

(二) 〓 線部 b 「機械的」と同じ意味で用いられている語句を本文中から抜き出しなさい。

(三) 〓 線部 c 「弛緩」^{しかん}と反対の意味で用いられている語句を本文中から抜き出しなさい。

(四)

A

、

B

 に入れるのに最も適当な漢字一字を、それぞれ答えなさい。

(五) 〓 線部① 「関係性を〓便利なものです」とありますが、どのような点が便利なのですか。「〓点」につながる表現を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。ただし句読点も字数に含めます。以下の問題も同様です。

(六) 〓 線部② 「大きな弊害」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 幸福な人生が送れるどころか、自分自身の成長も妨げられてしまうということ。
イ 人間関係を良好にするどころか、その本質である敬意が失われてしまうということ。
ウ 他者を認識するどころか、世間の変化にさえ気付かず自堕落な生活に陥ってしまうということ。
エ 自分や他者に対する認識が高まるどころか、人間関係に対する注意がおろそかになってしまうということ。

(七) ——線部③「これは敬語の人（）盛り込んでいけなくなってしまう」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本来あったはずの敬意の有無が、敬語の使い分けに反映されなくなってしまうということ。
- イ 敬語の細かな規則に縛られて、自分の心情が的確に表現できなくなってしまうということ。
- ウ 敬語には相手に対する暗黙の評価が込められているのだが、それを伝えることがためらわれてしまうということ。
- エ 敬語と敬語以外の言葉との使い分けが難しく、努力を怠るとその技術を身につけられなくなってしまうということ。

(八) ——線部④「常に緊張をもっていなければならない」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 敬語という言葉の持つ重々しい響きが、会話する者の気持ちを引きしめてくれるから。
- イ 絶え間ない緊張の中に身を置くことが、敬語の誤用を避ける有効な方法であるから。
- ウ 敬語には、相手との関係性についての自分が抱く認識を明確にする働きがあるから。
- エ 敬語を重視しなければならないという圧力に負けると、相手への接し方が変わってしまうから。

(九) ——線部⑤「とくにご婦人方の話し方はいい」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 敬語の使用頻度の高さにもてなしの心が感じられるから。
- イ 誰に対しても敬語を使用する姿勢におかしみを感じられるから。
- ウ 泥棒にまで敬意を払うことから敬語の本質をよく理解していると感じられるから。
- エ 敬語を使えば使うほど相手に敬意を表せると思っている無邪気さが感じられるから。

(十) —— 線部⑥「悪口を婉曲えんきよくに柔らかく言う」とありますが、このことに対する筆者の考えを説明したものととして、最も適当なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 皮肉ともとれる含みのある言い回しを肯定的にとらえて、そこに見られる使用者の姿勢を評価している。
イ 悪意を含ませる言い方を良くないものとして、もつと率直にわかりやすく表現することを推奨している。
ウ 辛辣な物言いを容認する立場に立って、その厳しさを寛容な態度で受容するべきだと主張している。
エ 冗長な言葉の使い方を認めた上で、相手に合わせて言葉を巧みに使い分ける態度を肯定している。

(十一) —— 線部⑦「きわめて高い洗練と悪の意識を盛り込む」とありますが、これはどのようなことですか。本文中の表現を用いて四十文字以内で答えなさい。

〔問題二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

中学校生活最後の文化祭の直前、「私(亜紀)」のクラスに相沢幹生という転校生がやってきた。初対面の時、「私」は、何かを見つめるようにしている幹生の目を見て、なぜか懐かしい気持ちに包まれたが、それがなぜなのか、考えてみてもまったくわからない。「私」は、それが気になって、学校にいる間ほとんど一日中、幹生のことを盗み見るようになっていた。「私」が幹生に恋心を抱いていると考えたクラスの友人たちによって、文化祭の実行委員にされた二人は、委員会が終わった後、連れ立って帰るようになった。

その日から、私たちは、つき合っている二人として、クラス中の生徒たちに認められてしまった。私は、言い訳をしなかった。私は皆が思っているように、幹生とつき合っている訳ではなかったが、私が彼に関心を持ったのは確かだったし、文化祭の実行委員会の後で、いつも、二人連れだつて帰るのは、a シュウチのことになっていたのだ。私は、次第に、彼が気を許し始めているのを感じていた。あの上の空の様子が、私と一緒にいる時、影を潜めるようになった。彼は、よく笑った。そして、そんな彼を見て、私も笑った。私

は、彼の笑顔が好きだった。それは、あの懐かしい気分を、私に忘れさせた。彼は、知り合ったばかりの男子生徒として、私の心に入り込んで来た。そこには、楽しさ以外に何もなかった。

それでも、私は知っていた。私と言葉を交わしていない時、幹生がやはり、まばたきもせず何かを見詰めているのを。私は、もう、その瞳を懐かしいとは思わなかった。そう思うには、私は、彼に好意を持ち過ぎていた。その表情をする時、彼が決して幸福ではないことを、私は知っていた。彼が、幸福ではないのだと思うことは、私の心を傷付けた。私は、その時、既に、好きな男には、呑気な幸せをさずけたいと願う程に□□になつていた。私は、自分に訪れた初めての恋というものを実感していた。それは、今までに一度も味わったことのない感情だった。甘酸っぱいものを思い出した時に頬がくぼむ、あの時の感じに、それはよく似ていた。私は、彼を悲しい場所には置きたくないと思つた。彼のことを心配しているというより、そうなつたら、自分自身がやるせないだろうと予想したからだった。私は、自分勝手にそんなことを思い、そして、そんな自分を許していた。私が楽しい気分になるためには、彼もそうでなくてはならなかった。もちろん、彼には、そんな自分の気持ちを伝えてはいなかった。親しく言葉を交わすようになったとはいえ、彼は、相変わらず、自分の領域を守り続けていて、そこに、私を入れることはなかった。私は、□□のおけない友人として振る舞うしか術を持たなかった。

「ねえ、相沢くんつきさ。ずい分、季節外れに転校して来たじゃない？ お父さんの仕事の都合とか？」

幹生は、私の質問に、一瞬、不意をつかれたようならたえた表情を見せたが、きわめて明るい調子で言った。

「ううん。うちのお父ちゃん、病気で仕事出来ないもん。だから、おばあちゃんに何とか面倒見てもらってる」

「お父さん、悪いの？」

「まあね。借金取りから逃げて来たんだけどさ、もう、逃げる必要もないみたい」

「……お母さんは？」

「さあ、おれがちっちゃかった時にどっか行つちやつたもん。男と逃げたらしいよ。おれって不幸だろ」

「そんな……」

私は、そういう不幸な家庭というものは、小説やテレビのドラマの中にしかないものだと思つていたので慌てた。

「そんな顔するなよ。今のは、全部、嘘だよ。冗談。今どき、そんな話、あるわけないだろ」

幹生は、そう言って、私の背中を叩いて吹き出した。私は、不安な気持ちに包まれたままだったが、彼の手が自分に触れられて

いるというだけで、気持ちが悪くなってしまふのだ。目の前に、好きな人がいるというのは、なんと気分が落ち着くものなのだろう。とりあえず、彼は、私の目の前で笑っている。それだけでいいのだ。だからこそ、余計に恐くなる。私の目の届かない所で、彼が、もし、つらい目に会っていたらと考えるだけで、私の心には暗い影がさす。

「亜紀は、おれのこと好きなの？」

突然、幹生は、そんなことを尋ねて、私を慌てさせた。私は、体じゅうの熱が、自分の顔の方に向かって行くような気がして、今にも倒れそうだった。

「どうして、そんなこと聞くのよ」

「そうかなって思ったから。おれのこと、いつも見てるんだもの。おまえ変なんだよな。おれと、ちゃんと向かい合って話ししてる時より、おれが、ひとりぼんやりしてる時の方が真剣に見詰めてるだろ。あれ、どうして？」

私は下を向いて目を固く閉じた。そして、言うべきことを彼に伝えなくてはと震える声で告白した。

「好きだから。①心配だから」

「何が心配なの？」

「わかんない。私と話してる時は、私が相沢くんのこと笑わせてあげられるからいいけど、ひとりの時は、そうじゃないから」

幹生は、困った表情を浮かべて、黙っていた。私は、彼を不愉快にしまったのだろうかと不安になり、尋ねた。

「怒った？ 余計なお世話だった？」

「まさか」

彼は、首を横に振った。

「おれも、亜紀のこと、好きだな」

「ほんと？ どうして？」

「どうしてって言われても困るけど、亜紀って変な奴だもん。おれの目が懐かしいって言ったりしてさ。今でも、そう思う？」

「思いたくない」

「どうして？」

「なんだか怖いから」

幹生は、私を抱き寄せた。夕暮れだった。公園には、何組かの恋人たちがいたが、私は、自分と幹生が一番、せつないと思った。私たちは、恋を語り合うには幼な過ぎるのだ。肩を寄せ合うこと以外にどうして良いのか解らない。お互いに好きだということしか解らない。

「どんどん日が暮れるの早くなって行くね」

「うん。でも、空気が冷たくなる程、夕方の空って綺麗なんだよね。私、寒くなって行くのって嫌いじゃないよ。幹生は？」

「おれは嫌いだった。なんか寂しいもん。でも、今はいいな。これからも平気かもな。おれ、寒がりだけど、吐く息が白くなって行くってことは、体の中があつたかいってことだもんな」

私は、涙ぐみそうになった。私は、この先、どんなことがあつても、幹生に寂しい思いをさせたくないなあと思うのだった。彼の瞳には、相変わらず涙の膜が張っているように見える。けれど、それは、決して上の空の涙ではない。私が側にいることが、彼の瞳を濡らしているに違いないのだ。

「文化祭、がんばろうな」

「うん。最後だもん。終わったら本格的に受験勉強だしね。幹生は、どこ受けるの？」

「ほんとのこと言うと、高校は諦めてたんだ。おれんち、貧乏だからさ。でも、なんか、大丈夫のような気がして来た。もしかしたら、なんとかなるかもしれない。働いたって行けるんだし」

私は、幹生の手に触れた。彼は、私の手を握り、そのまま自分のジャケットのポケットに押し込んだ。私たちは、顔を見合わせて笑い出した。彼は、すまなそうに言った。

「ちよつと、狭いけど……」

私は、力を込めて彼の手を握り返した。幸せだった。笑い続けていた。

私が家に帰ると、母は夕食の支度をしながら、駄々をこねている妹をなだめていた。私は、いつもより帰りが遅くなったのをとがめられはしないかと心配していたが、それどころではないようだった。

「あ、お姉ちゃん、もう、ママ、困っちゃって」

「どうしたの？」

妹は、待つてましたとばかりに、私の側に駆け寄つて来た。

「お姉ちゃんからも、ママに頼んでよ。今日ね、新宿のデパートの前で、お店が出て、うさぎ売ってたの。すっごい可愛いんだよ。真利子、あれ、絶対欲しい!!」

私は馬鹿馬鹿しくなって、着替えをすべく二階に上がろうとした。私の心の中は、うさぎどころではなかった。幹生の手の感触が、甘い毒のように全身にまわり、日常的なことが、すべてくだらないように思っていたのだ。

「ねえ、お姉ちゃんからも、言つてよお。二人で、うさぎ飼おうよ」

妹は、半分泣き声で、訴えていた。母がたまりかねたように大声で、彼女をたしなめた。

「いい加減にしなさい!! 大分前にも、そうやって、無理矢理、お祭りで、ひよこを買つて来て死なせちゃったことあったじゃないの。あの時のひよこの顔、覚えてないの!? 世話も出来ずに、買つて来て。ママは、もう、あんな思いするの嫌よ!!」

私は思わず振り返つて母の顔を見た。

「どうしたの、お姉ちゃん」

私は何かを言わなくてはと口を開きかけたが、声が出なかった。

「気分でも悪いの?」

私は首を横に振るのが精一杯だった。②私の心の中に詰まっていたものが、急激に溶けて流れて行った。

「ママ、あのひよこ……」

「そうよ。あなたも覚えてるでしょ。真利子ったら、本当に自分勝手なんだから。あの死ぬ前の可哀相なことったら」

私は、さつきまで握られていた手を、手の平に爪が食い込む程、握り締めた。それと同時に、私は、あの懐かしい瞳を思い出した。そうだったのだ。私が、幹生の瞳に出会った時、私の記憶を疼かせたのは、あのひよこの目だったのだ。

あの時、ひよこは、自分の死を予期しているかのように澄んだ瞳を見開いていた。ただ一点を見詰めながら、私の手の上で、静かに、その時を待っていた。私は、その様子を見て、何故か恐怖を感じたのを覚えている。何もかも映しているようで、何も見えない目。ひよこが自分の死期について考えていたとは思えない。けれど、確かに、死は、ひよこをとらえていた。母や妹は、悲しみで肩を落としていたけれども、私は、ひよこを見守り続けたのだ。まるで、憑かれたように、私は、その小さな生き物が最後の力を振り絞り、目を見開いているのを見続けていた。ただ不思議だった。c テイカンという言葉を、その頃、知る由もなかったけれども、私は、ひよこの瞳を見詰めながら、そのことを思っていたような気がする。

「だって、ひよこは、最初っから、生きる気なんてなかったよ、ママ。うさぎは大丈夫だもん。真利子、絶対に、面倒見られるもん」
私は、妹の声で我に返り、二階に駆け上がった。心臓が激しく鳴っていた。私は、床に腰を降ろし、ひよこの瞳を頭から消そうと首を振った。すると、今度は、幹生の瞳が、私をとらえて離さなくなつた。懐かしいなんて嘘だ。私は、最初から、彼のあの目に引かれていたのだ。そして、恐ろしさのあまりに、恋をしてしまったのだ。死を見詰めている瞳。あの人は予感しているのだ。でも、私に、いったい、何があげられるのだろうか。ひよこは、とうの昔に死んでしまったのだ。

私は、その夜、沢山の夢を見て、そのたびに、自分の叫び声で目を覚ました。ひよこの目の幻影は、朝まで、私を悩ませて、私は一晩の内に、恐怖を知り尽くしたかのように疲れ果てていた。母は、私が、風邪でも引いたのだらうと思ひ、大事を取つて、学校を休むように言った。私は、大切な授業があるからと嘘をつき、重い足取りで、家を出た。私は、恐ろしい予感を抱いていたので、休む訳には行かなかつたのだ。

幹生は、その日から、学校に来なかつた。父親が病気を苦に自殺を計り、その道連れにされたのだという噂うわさが、朝から、まことしやかに囁ささやかれていた。けれど、皆、私を気づかつて、騒ぐことも出来ないのだつた。私は、皆が思う程、衝撃を受けていなかった。出会った時から、実は、そのことを知っていたような気すらしていたのだ。

二、三日後に、担任教師の口から、そのことが伝えられた。私たちは黙とうをするように言われて、皆で目を閉じた。私だけが、その最中に、こっそりと目を開けていた。私は、この年齢にして、人間の思う通りに行かないことがあるのを知つてしまい、すっかり気落ちしていた。彼は、あの公園で、確かに生きようとしていたのに。そして、私の手をきちんと握つたのに。あの人は、私が初めて出会つた、人生に対して礼儀正しい人だったのに。そう思つたら、口惜しくて、泣けて来た。誰も、何も言わなかつた。私だつて、何と言つて良いのか解らなかつた。死ぬなんて憎らしいことだ。私は、ただそう思つて泣き続けていた。

(山田詠美『ひよこの眼』より)

(二) に入れるのに最も適当な漢字一字を答えなさい。

(三) に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 天狗 イ 天使 ウ 大人 エ 従順

(四) —— 線部①「心配だから」とありますが、この時の「私」の心中について具体的に述べている部分を本文中から三十字以上三十五字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出さない。ただし句読点も字数に含めます。以下の問題も同様です。

(五) —— 線部②「私の心の中に詰まっていたもの」とありますが、それは何ですか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 幹生とつないだ手のぬくもり イ 幹生との将来に向けた希望
ウ 幹生の目から感じる懐かしさ エ 幹生との時間がもたらす喜び

(六) —— 線部c「テイカン」について具体的に述べている部分を二十字以内で探し、最初の五字を抜き出さない。

(七) 本文において、「幹生」の気持ちはどう変化していますか。本文中の表現を用いながら、五十字以内で説明しなさい。

〔問題三〕 次の文章に関して後の問いに答えなさい。

日本は自然が A 美しい。第一に山が緑である。このような国は世界になかなかない。日本の紅葉が世界一美しいと言われているのは、木の種類が違うからである。日本には木の種類がいっぱいある。 B 前に漢字というのは中国にあるものを輸入してそれで日本語を書いたと述べたが、木偏の文字に関しては ① 国字が多い。国字というのは日本で作った漢字のことである。例えば木の名前で言うと「榊」^{さかき}という字、木偏に神と書く。中国にはそんな漢字はない。日本人は「さかき」というのを漢字で書きたいと思って、「さかき」は神に捧げる木ということと木偏に神と書いたのである。

木偏に次いで国字が多いのは魚偏である。魚偏に雪と書いて「たら」と読む。魚偏に弱いと書いて「いわし」と読む。いかに日本が魚の国であるかということを表している。

また日本のように水の美しいところは少ない。小学校のとき「山はあおき故郷、水は清き故郷」という唱歌を習ったと思うが、日本だからああいう C 歌ができるので、もつと感謝を持つてあの歌を歌い、日本人の幸せを感じていただきたいものである。「濁る」という言葉がある。和英辞典を引くと、to go to be dirty と書いてあるが、日本では泥水にならなくてもちよつと不純になつてしまつと、「濁る」という言葉を使う。 ② 与謝蕪村の ③ 俳句に「二人してむすば濁る清水哉」というのがある。おそろく若い男女の二人連れが、道ばたの岩からしみでる清水を飲もうとしたのだろう。二人で手を入れたら、底の方に沈んでいた砂が少し浮いてきたという意味かと思う。つまりほんのちよつと濁つても、日本人は「濁る」と言う。それくらい日本の水はきれいだということである。

最後に人間の体に関する言葉の話をしたい。日本語では人体に関しては非常に無関心である。例えば「くび」と言うと、くびれているところも、その上全体の部分も「くび」と言う。漢字ならばくびれているところは「頸」^{くび}にあたり、その上全体は中国では「首」という字を書く。「あし」にしても、日本では腰から下全体も「あし」だし、靴の中に入っているところも「あし」である。中国では腰から下全体は「脚」で、靴の中に入っているところは「足」と表す。そのように、ただ「くび」「あし」といつても、どの部分を指すか日本語ははっきりしないのである。

アメリカ人に日本語を教えていたら、その人が「先生、 ④ 腰をかけるとはどういうことですか」と聞く。私はこんなことも知ら

ないのかとあきれながら、椅子に腰をかけて見せた。するとそのアメリカ人は、「先生は『尻』をかけました。腰をかせませんでした」と言う。これには参った。確かにそのとおりである。日本人は尻なんていう言葉は、品が良くないと思って使わない。肉体的なものあまり話題にしない傾向がある。

『百人一首』で使われる和歌なんかもそうである。手、口、鼻、耳なんて言葉は出てこない。よく出てくるのは衣や着物である。「衣かたしきひとりかも寝ん」「わが衣手に雪は降りつつ」という具合に着物に関して是非常にたくさん出てくるのだが、肉体は歌に詠むべきものではないと思っていた。肉体をどんどん詠むようになったのは明治以降である。⑤ 石川啄木の「働けど働けど猶わが生活楽にならざりぢつと手を見る」とか、⑥ 与謝野晶子の「やわ肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君」という歌はいかにも近代歌人のもので、昔はなかった。

『源氏物語』にしてもそうである。□□ という人は『源氏物語』を五十四帖書いているが、その中に光源氏の容貌については何一つ書いていない。「光源氏は光り輝くばかりに美しかった」「光源氏に会った女性はみな心を奪われた」というような、抽象的、間接的な表現だけで、読者にその美しさを想像させようとする。『源平盛衰記』にしてもそうで、那須与一という弓の名人が扇的射止める話。あそこで作者はどのように書いているかと言うと、「与一、そのころは二十歳ばかりの男なり」と年齢をまず書く。その次はすぐに服装に入ってしまう。「褐に赤地をもつて大領、端袖彩えたる直垂に」、つまりどのような鎧を着て、どのような兜をかぶり、どういう弓を持ち……とこれが非常に詳しい。読む人はそのような服装を最初に思い浮かべ、それに合うような顔を勝手に想像する。これが日本式のものである。

(金田一春彦『ホンモノの日本語』より)

(二) ——— 線部①「国字」とありますが、次の中から国字を二つ選び、記号で答えなさい。ただし、解答の順序は問いません。

ア 峰 イ 働 ウ 芋 エ 机 オ 鯨 カ 畑

(二) 〓 線部A「美」、B「前」、C「歌」、D「尻」の部首名を後から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返して用いてはいけません。

ア にくづき イ しかばね ウ だい エ りつとう オ ひとあし カ ひつじ キ ぼくづくり

(三) 〓 線部②「与謝蕪村」とありますが、次の中から蕪村の句を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 春の海終ひねもす 日のたりのたりかな イ 梅一輪一輪ほどの暖かさ
ウ 朝顔つるべに釣瓶つるべとられて貰もらひ水 エ 大根だいこ引き大根で道を教へけり

(四) 〓 線部③「俳句」とありますが、次の句の作者を後から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはいけません。

I めでたさも中位なりおらが春
II 五月雨をあつめて早し最上川

ア 正岡子規 イ 松尾芭蕉 ウ 高浜虚子 エ 斎藤茂吉 オ 小林一茶

(五) 〓 線部④「腰をかける」は「座る」という意味ですが、「腰」の部分_を他の語に置きかえると意味が変わります。次の意味となるような、体の部位を表す漢字一字の語をそれぞれ答えなさい。

I いろいろの面倒なことを処理する。
II かわいがって面倒をみる。

(六) ——— 線部⑤「石川啄木」、⑥「与謝野晶子」について説明した次の文章の
それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはいけません。

与謝野晶子は、明治十一年生まれ。夫である与謝野鉄幹とともに短歌誌『I』で活躍した、いわゆる『I』派の歌人である。明治三十四年に歌集『II』を刊行したが、かつてない大胆な自己の肉体への賛美、恋愛への情熱を詠み込んだ歌風は多くの歌人に影響を与えた。

石川啄木は、明治十九年生まれ。貧困と病気に苦しみつつも、その生活を直視する歌を詠んだ。歌集には『III』、『悲しき玩具』がある。

- ア みだれ髪
- イ アララギ
- ウ 明星
- エ 馬酔木あしび
- オ 赤光
- カ 一握の砂
- キ 春と修羅

(七) 本文中の に当てはまる人名を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 小野小町
- イ 清少納言
- ウ 和泉式部
- エ 紫式部

(以上)